

ご挨拶

『薔薇に秘めた想い』

－ マリー・アントワネットの想いとルドゥーテが作品に残した薔薇の軌跡 －

『薔薇に秘めた想い』は、フランス王妃マリー・アントワネットが追い求めた美と豊かさに迫る特別企画展です。王妃が愛した薔薇をはじめとする植物を描いた画家ピエール＝ジョゼフ・ルドゥーテの作品を通して、華やかな宮廷生活の奥に潜む運命や歴史、そして王妃の秘められた想いを紐解きます。

贅を尽くし、美を愛したマリー・アントワネット。しかし近年では、美しいものを「素直に愛した女性」として愛した一面にも光が当たっています。フランス革命の渦中、若くして王妃となった彼女は、庶民の憧れでありながら、その華やかな衣装や生活が浪費と批判の対象でした。そんな王妃の姿を描いた最も有名な作品のひとつが、女流画家エリザベート＝ルイーゼ・ヴィジェ＝ルブランの「マリー・アントワネットとバラ」。そこには、100枚の花びらを持つという意味のオールドローズ「ロサ・ケンティフォリア」の一種が描かれています。王妃は毎朝異なるドレスを選び、日に三度も着替えたと伝えられており、そのような生活の中で描かれた薔薇は、まさに彼女が追い求めた「美の情熱」を映し出している象徴とも言えるでしょう。

一方、ルドゥーテは13歳の頃、“花の画家”ホイスムの作品に出会い、“花の絵”の世界に魅了されました。その後、植物学者レリティエの提案で植物図譜制作の仕事を始め、宮廷画家としてマリー・アントワネットが求めた美の世界に息吹を与えつつ、実力を開花させます。やがて“近代バラの母”とも呼ばれたナポレオン皇妃ジョゼフィーヌ・ド・ボアルネの庇護のもと、薔薇に魅せられた皇妃のために手がけた代表作『バラ図譜』を完成させました。薔薇を愛したマリー・アントワネットと同じく、ジョゼフィーヌもまた薔薇に心を寄せ、その情熱がルドゥーテの筆を通して結実したのです。

本企画展では、王妃の私的な宮殿となるプチ・トリアノンの庭園をモチーフに、ルドゥーテの作品「バラ図譜」「美花選」「多肉植物図譜」などを紹介します。「バラ図譜」は全169点の中から、精緻で繊細な点刻彫版法で花々の自然な美しさを描き出した23点の作品を展示。その卓越した技巧と繊細な描写は、今もボタニカル・アート史における金字塔とされています。「美花選」は全144点の中から厳選した10点を展示。色とりどりの花々や可憐なブーケは、写実性と芸術性を巧みに融合させ、観る者に息をのむ美の瞬間を届けます。そして、「多肉植物図譜」の中の月下美人を取り上げ、マリー・アントワネット幽閉中の想いを映したと伝わる逸話とともに紹介する構成としました。その逸話は絵本『Redouté: The Man Who Painted Flowers』で、王妃との最後の出会いの物語として描かれています。ひと夜だけ咲く花に重ねられた精緻で儚い美の物語を、ルドゥーテと王妃の深い絆とともに感じてください。さらに、本展ではアントワネットが愛したとされるチェンバロの演奏会も開催。音楽とともに、王妃が求めた美の世界を五感で体験していただけます。

主催・企画 ラリス株式会社

代表取締役社長

アートプロデューサー 松岡 久美子

